

一八八四年十月二十日(月)

タクール、聖ラーマクリシュナ、マルワリ地方出身の信者たちと共に

タクール、聖ラーマクリシュナ、ボロバザール地区のマルワリ出身の信者たちと共に

今日、タクールはボロバザール地区のマリック街十二番地に来ておられる。マルワリ地方(中央インド、ラジプタナ地方)出身の信者たちがアンナクータ祭を祝っていて、タクールをご招待申し上げたのである。二日前のカーリー祭プーシャでは、タクールは南神村で信者たちと共に祭を心からお楽しみになった。その後また、信者たちとシンテイのブラフマ協会の大祭に行かれた。今日は月曜日でキリスト暦一八八四年十月二十日。カルティク月白分のはじめ(二日目)。ボロバザールではいま、デーワリー(ヒンドゥーの秋の大祭、光の祭の行列)の喜びに満ちた祭がつづいていた。

およそ三時ごろ、校長は若いゴパールといっしょにボロバザール地区にやってきた。タクールが沐浴用の腰布を買ってこいとおっしゃったので、それを買って持ってきた。紙で包んで片方の手に持っている。マリック街に二人が着いてみると、ものすごい雑踏で馬車だの牛車だのがひしめきあっていた。やっと十二番地のあたりにたどり着くと、タクールのお乗りになっている馬車が身動きもできず

にしているのが見えた。馬車のなかにはバブラームとラーム・チョットパツダエ(ヴィシユヌ堂の司祭)もいた。ゴパールと校長の姿をごらんになって、タクールは微笑ほほえまれた。

タクールは馬車からお降りになった。バブラームと校長は先にたつて道をあけながら進む。マルワリの信者たちの家に着いてみると、階下と中庭には布地の大包みが所狭しと置いてある。ところどころに牛車があつて、そこへ荷物を積み込んでいるところだ。タクールは信者たちと二階へ上げられた。マルワリの信者たちも来て、タクールを三階の部屋にご案内した。その部屋には大実母カーリーの絵像がかけてあつた。タクールはすぐ合掌してごあいさつされた。お坐りになると、笑いながら信者たちを相手に話していらつしやる。一人のマルワリの信者が近づいてきて、タクールの足をさすりはじめた。タクールは、『いいよ、いいよ』とお止めになつたが、また何かお考えになつたらしく、『うん、ほんの少しだけさすつておくれ』とおつしやつた。お言葉は慈悲に満ちていた。

校長におつしやる——「学校の方は？」

校長「はい、今日は休みでございます」

聖ラーマクリシュナ「ハハハハ、あしたはまた、アダルのところでチャンディーの吟詠うたがあるんだよ」  
マルワリの信者であるこの家の主人は、一人の学者をタクールのところによこした。

学者は部屋に入ると、タクールにあいさつをして座についた。タクールはこの学者と神に関する様々の話をなされた。

〔聖ラーマクリシュナの欲望——信仰欲——パーヴァ、バクティ、プレーマ——プレーマの意味〕

神の化身についての話が持ち上がった。

聖ラーマクリシュナ「信仰者のための化身だ。智者のためじゃない」

学者「パリットラーナーヤ サードウナーン ヴィナーシャヤ チャ ドウシユクリターム  
 ルマ・サンスターパナルターヤ サンバヴァーミ ユゲー ユゲー(サンスクリット)」〔善人を守るた  
 め、悪人を滅ぼすため、正義を確立するため、あらゆる時代にわれは化身す〕ギーター4・8)

第一に、信者を喜ばせるために化身なさるのです。第二は、悪人を滅ぼすために——。しかし、  
 智者には欲がありませんから——」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハ、でも、わたしは欲が全部なくなったわけじゃないよ。わた  
 しには信仰欲というものがあつてね」

このとき学者の息子が入ってきて、タクルのお足を拝してから席に着いた。

聖ラーマクリシュナ「ところで、ジー！ パーヴァとはどんなもので、バクティとはどういうもの  
 かねえ？」(訳註、ジー——聖者など尊敬する人物につける尊称)

学者「神を想うことよって心が柔軟になった状態、これをパーヴァと申します。太陽が昇つて、  
 氷が溶けるようなものです」

聖ラーマクリシュナ「では、ジー！ 聖愛ブレイマとはどういうものかね？」

学者はヒンディー語で話している。タクルも彼にあわせて、大そう甘いヒンディー語を使つてお

られる。学者はタクルの質問に答えて、<sup>ブレイヤ</sup>聖愛について一通りの説明をした。

聖ラーマクリシユナ「(学者に向かつて)——いや、<sup>ブレイヤ</sup>聖愛とはそんな意味ではない。<sup>ブレイヤ</sup>聖愛とはね、神が大好きになって、この世のことも、一番大切なはずの自分の体のことさえも忘れてしまふ、そういう状態のことだ。チャイタニヤ<sup>デシヤ</sup>様がそうだった」

学者「は、おっしゃる通りです。酔ったような状態になります」

聖ラーマクリシユナ「では、ジー、ある人は信仰を持つようになり、ある人は持たない。これはどうしてだろうね？」

学者「神に不公平はありません。あの御方はカルパタル(万願成就の木で、求めるものは必ず得られます。しかし、カルパタルの木のそばに行つて求めなければなりません」

学者はヒンディー語でこういうことを話している。タクルは校長の方を向いて、この話をベンガル語で説明して下さい。

### 〔三味の原理〕

聖ラーマクリシユナ「では、ジー、<sup>サマデー</sup>三味の説明をしてみして下さい」

学者「三味には二種類あります——サヴィカルパ<sup>サマデー</sup>三味とニルヴィカルパ<sup>サマデー</sup>三味です。ニルヴィカルパ<sup>サマデー</sup>三味では、ヴィカルパ(心の働き)がなくなりません」(訳註、サヴィカルパ<sup>サマデー</sup>三味——主体・客体の区別を認識している三味、神と我との合一。ニルヴィカルパ<sup>サマデー</sup>三味——主体・客体の区別を超えた最高の三味)

聖ラーマクリシユナ「うん、心は完全に実在の相となる。冥想するものと冥想されるものの区別がなくなるんだ。このほかにもチエタナ三昧サマデーとジヤダ三昧サマデーがある。ナーラダやシユカデーヴァのような方々はチエタナ三昧サマデーになりなすつた。ジー、どうですか？」(訳註、チエタナ三昧——私と神との関係を意識している。ジヤダ三昧——無生物のようになる三昧サマデー)

学者「は、おっしゃる通りです！」

聖ラーマクリシユナ「それから、ジー、ウンマナ三昧サマデーとステイタ三昧サマデーがある。そうでしょう、ジー？」(訳註、ウンマナ三昧——心のはたらきが完全に停止していない三昧サマデー。ステイタ三昧——神の意識に心を安定させた三昧サマデー)

学者は黙ってしまった。何も言えなくなった。

聖ラーマクリシユナ「ときに、ジー、神の名やマントラをとなえることによって、神通力が得られる——たとえばガンジス河の上を歩いて行ける。そうですか？」

学者「は、それは出来ませんが、しかし、信仰者はそんなことを求めません」

また、何ほどか会話をつづけた後、学者は、「エーカーダシードツキートシヨルの日に南神村へ行って、あなた様にお目にかかるつもりです」と言った。(訳註、エーカーダシー——新月および満月から11日目、信者は一日の全部または一部を断食し、祈り、礼拝して過ごす)

聖ラーマクリシユナ「アハー、あなたの息子さんは立派だねえ」

学者「ですが、お上人マハーラジ！ 河の波は現れては消え、又現れては消え——すべては無常でございます」

聖ラーマクリシユナ「あなたは、ちゃんとしたものを持っているね(本質をつかんでいる)」

すこし経つと学者は礼をして、「礼拝をする時間ですから——」と言って立ち上がりかけた。

聖ラーマクリシュナ「まあ、まあ、お坐りよ！」

学者は、また腰を下ろした。

タクルルはハタ・ヨーガの話をなさつた。学者はヒンディー語でこのことについてタクルルと話した。タクルルは、「ウン、あれも一種の苦行にはちがいないが、ハタ・ヨーギーは肉体自慢のサードウダ——肉体のことにはかり心をつかっている」

学者は再びおいとまのあいさつをして、礼拝をしに行った。

タクルルは学者の息子と話をはじめられた。

聖ラーマクリシュナ「ニヤーヤやヴェーダーンタなどの哲学を勉強した人は、シユリーマッド・バールガヴァタの意味がよく理解できるんだよ。分かるかい？」

息子「はい、お上人様！ サーンキヤ哲学の勉強は大そう必要でございます」

このような種類の会話がつづいていた。

タクルルは枕によりかかるとして横になっておられ、学者の息子と他の信者たちは床に坐っている。タクルルは横になつたまま、歌をおうたいになった。——

明るく楽しく学び努め

喜び勇んで歩こうよ兄弟

進めば必ず彼の岸に  
到くぞ輝く神の国

### 神の化身は今いないか？

主人が入ってきてあいさつをした。彼はマルワリ地方出身の信仰者で、タクールに心から帰依している。学者の息子はまだそこに坐っている。タクールは、「パーニニ文法はこの地方で勉強できるのかい？」(訳註、パーニニ文法——パーニニと言う学者が体系づけたサンスクリットの文法)

校長「はい。パーニニのことでございますか？」

聖ラーマクリシュナ「うん、それからニヤーヤやヴェーダーンタのような哲学もみんな、ここで勉強できるのかい？」

主人は、こういったことにはあまり関心がないらしく、タクールに別な質問をする。

主人「お上人様、解脱の方法をお教え下さいまし——」

聖ラーマクリシュナ「神の名をとまえ、讃歌をうたうこと。サードウと交流すること。一生懸命にあの御方に祈ること」

主人「はい。世間のことに関心が薄くなりますように、どうぞ祝福をお授け下さいまし——」  
聖ラーマクリシュナ「ハッハッハ、現在どのぐらい関心があるんだい？ ハアナ(50%)くらいいか？」

アハハハ……」

主人「はい。あなた様はご存知でございます。尊い御方のお慈悲がなくては、私共はどうにもなりません」

聖ラーマクリシユナ「あちら(神)が喜べば、あらゆるものが喜ぶ。聖者の胸には、あの御方がいなさるんだよ」

主人「あの御方に触れたら、もう問題はありませぬ。神に触れた人なら、すべてを捨てることができます。札束を手に入れたら、小銭の楽しみは要りませぬ」

聖ラーマクリシユナ「何か少し、修行が必要だ。修行をしているうちに、だんだんと本当の喜びがわかってくる。地面のうんと深いところに宝の入った壺が埋まつていて、誰かがその宝を欲しがったとすれば、苦勞してでもそれを探しあてなけりゃならぬ。額に汗もかくさ。でも、さんざ堀ったあげく、シャベルが壺に当たってタンという音がしたとき、どんなに嬉しいか。タン、タンと音がするたびに嬉しくて、嬉しくて——。ラーマに呼びかけろ。あの御方のことを想え。ラーマがすべていいようにして下さるよ」

主人「お上人様、あなた様こそラーマです」

聖ラーマクリシユナ「何を言ってる、河の波だよ。波の河だとも言う気かい？」

主人「聖者のなかにラーマがいらっしゃるのですから——。ラーマそのものを見るわけにはいかないのですから——。それに、現代は神の化身はいらっしゃいません」



聖ラーマクリシユナ「アハハハハハ、どうしてわかつたイ？ 神の化身がないと——」

主人は黙っている。

聖ラーマクリシユナ「神の化身は、すべての人がそれと見分けられるものではないよ。ナーラダがラーマに会いに行きなすつたとき、ラーマは立ち上がつてサシユターンガ礼拝ブライトムをして、それからこう言いなすつた。——『私どもは世間に住む人間であります。あなた様のようなサードウがおいで下さらなければ、どうして身心こころを浄めることができましよう？』その上、父親の誓約を果たすために、ラーマは森に追放された。そのとき、ラーマの森住まいを聞いたリシたちが、それ以来断食をしている。ということを知つた。ラーマは至高パトラブラフマンそのものの顕現だということを、大方のリシたちは知らなかつたのだ」(訳註、サシユターンガ礼拝——体の八つの箇所：頭、目、口、胸、へそ、手、膝、足を地につける礼拝つまり、全身を投げだしてする最高の礼拝)

主人「あなた様も、そのラーマです！」

聖ラーマクリシユナ「ラーマ！ ラーマ！ そういうこと言うなつたら——」(訳註、ラーマ、ラーマ——「神様、おたすけ下さい」という意味)

こうおっしゃって、タクルルは手を合わせておじぎをなさり、「おお、ラーマは一つ一つの生き物のなかに在います。おお、ラーマは世界に遍あまねし！ わたしはお前たちの召使いだ。あのラーマがすべての人間や動物になつていなさるのだ」とおっしゃつた。

主人「お上人様マハーラシ、私共には、それがわかりません」

聖ラーマクリシユナ「お前がわかるうとわかるまいと、お前はラーマなんだよ！」

主人「あなた様には怒りや嫉妬の気持ちがありません」

聖ラーマクリシユナ「どうして？ 馬車でカルカッタまで行くことになって、ダシヤ駈者に（銅貨で）三ア  
ナ前払いしておいたのにやってこなかった。腹が立ったよ！ ホントに悪い奴じゃないか。人に迷惑  
をかけて——」

### ボロバザールのアンナクータ大祭のなかでマユーラ・ムクタ・ダーリーの礼拝

タクール、聖ラーマクリシユナは少しお休みになっておられる。一方、マルワリの信者たちは、外  
の屋上で讃仰の歌をうたいはじめていた。今日は大聖マユーラ・ムクタ・ダーリー（クリシユナ）のお祭  
なのである。神に供える山のようなごちそうは既に用意してある。祭神像を拜んで下さるようと、  
彼等はタクールをご案内した。マユーラ・ムクタ・ダーリーの像を拜して、タクールはおじぎをされ  
てから、花をいくつかお取りになってご自分の頭に当てられた。（訳註、マユーラ・ムクタ・ダーリー——孔  
雀の羽の王冠を着けた者の意味で聖クリシユナを指す）

神像を拜んで、タクールは法悦にひたつておられる。合掌したままこうおっしゃる——「命だ、ゴ  
ヴィンダはわたしの命だ！ ジャイ・ゴヴィンダ、ゴヴィンダ、ヴァースデーヴァ、サツチダー  
ナンダの化身の姿！ おお、クリシユナ、クリシユナよ、智識はクリシユナ、心はクリシユナ、命は  
クリシユナ、アートマ・クリシユナ、体はクリシユナ、カーストはクリシユナ、血筋はクリシユナ、

命だ、ゴヴィンダ、わたしの魂だ！」

こうおっしゃっている間に、タクールは立ったまま三昧に入られた。ラーム・チョットパツダエ氏がタクールの体を支えていた。

しばらくしてから、三昧は解けた。

一方、マルワリの信者たちは、玉座に置かれたマユーラ・ムクタ・ダーリーの像を外に運び出した。屋外で供物を捧げるのである。

聖ラーマクリシュナの三昧はすっかり解けた。マルワリの信者たちがぎやかに神像の玉座を外に運び出しているのをごらんになって、タクールもいっしょに行列に参加された。

供物が供えられた。供物が供えられているあいだ、マルワリの信者たちは布でそれをかくしていた。

(訳註——神様へお供えされた食べ物を見ることで、食べたい、美味しそうという気持ちが移らないように、神様がお食事終わるまでは、人の目に触れることのないようにしている)

お供えがすむと、<sup>アールティ</sup>献灯と歌がはじまった。聖ラーマクリシュナはチャマラ(<sup>ほっす</sup>私子)で神像に風を送っていたらっしゃる。

こんどはバラモン達への食事の接待がはじまった。屋上で、タクールの正面ですべての行事は執り行われた。マルワリの信者たちは、タクール、聖ラーマクリシュナに召し上がって下さるようにお願ひした。タクールはお坐りになり、信者一同も供物のお下がりを受戴した。

〔ボロバザールから大通りへ——ディーワリー<sup>の</sup>の光景を通り抜けて〕

タクールは別れをお告げになった。夕方である。街路は来たときと同じように大へんな人ごみである。タクールは、「馬車から下りた方がいいようだね。馬車は裏通りをまわって行けばいいから——」とおっしゃった。道を少し歩いて行くと、タクールは嘔みタバコ<sup>の</sup>売りが穴のような部屋の前で店を開いて坐りこんでいるのをごらんになった。そこに入るには頭を思いきり下げて行かなければ入れない。タクールはおっしゃる。「大へんだなあ、こんなところに閉じこもっているとは！ 世間の人たちはこんなことまでして！ それでも楽しいのかねえ！」

馬車は裏通りをまわってやって来た。タクールは再び馬車にお乗りになった。タクールといっしょに来たのはバブラム、校長、それからラーム・チャトジェ<sup>の</sup>。若いゴパールは馬車の屋根に坐っていた。乞食女<sup>こじき</sup>が一人、赤ン坊を抱いて馬車の前にきて物乞いをした。タクールはそれをごらんになって校長に言われる——「ねえ、銅貨があるかい？」若いゴパールが銅貨を一枚やった。

馬車はボロバザール地区を通って行った。ディーワリー<sup>の</sup>の煙がたちこめている。暗い夜を、光また光の行列だ。ボロバザールを出て馬車はチットブル街に入った。そこも灯火で明るく、まるで蟻の行列のように人また人。人々は一樣にポカンと口をあけて、両側にならんだ飾りや露店を眺めている。菓子<sup>の</sup>の店にはカップや小壺に入れたいろんな種類の甘いものが並んでいるし、また香水を売る店もあり、さまざまの絵を色鮮やかに並べて売る店もある。店の主人たちはきれいな服を着て、お客の体にバラ香水を振りかけている。馬車は一軒の香水店の前に停まった。タクールは五つくらいの子

供のように、絵や灯火あかりを見ながら大はしゃぎをしておられる。どこもかしこも大にぎわいである。タクルは大声をあげておっしゃる——「もつと先を見よう！ もつと先へ行こう！」と言いながら楽しそうに笑っておられる。パブルームに向かつて大きな声で笑いながらこうおっしゃった。「オーイ、止まるな。何してるんだい？」

〔前進せよ——タクルは貯えず〕

信者たちは愉快そうに笑いだした。彼等はタクルが、神の方に向かつて前進せよ。自分の現状に満足して停滞してはいけぬ」と言っておられるのだと理解したからである。修行僧ブラフマチャリが木こりに言ったのだ。もつと先へ行け」と。木こりが先へ進むと、白檀の林を発見した。また何日か後にそれから先に行ってみると、銀山を発見した。またその先へ行ってみると、こんどは金山。さいごに寶石の山！ この話にことよせて、タクルは繰り返し繰り返しおっしゃるのだ——先へ進め、前進せよ」と。やがて、馬車は動きだした。校長が布を買ってきているのにタクルは気付いておられた。沐浴用の腰布バスタオルのようなもの二枚と、さらし木綿の布を二枚とである。タクルは腰布だけを買ってくるようにとおっしゃったのだ。タクルは、『腰布二枚をおくれ、こちらの布は持つてお帰り。でもそうだ、一枚だけでもらつておこう』とおっしゃった。

校長「はい、一枚だけ持つて帰るのでございますね？」

聖ラーマクリシュナ「いや、今はよそう。これは二枚とも持つてお帰り」

校長「仰せの通りにいたします」

聖ラーマクリシユナ「また必要になったら、持ってきてくれ。ほら、わかるだろう。昨日、ベニー・パルがラームラルに食べ物をことづけようとして馬車のところに持ってきた。わたしは言っただろう。『わたしに、何も持たさないでくれ』と。貯める<sup>た</sup>ということは、まったく出来ないんだよ」

校長「はい、よくわかりました。さらし布二枚は今日持って帰ります」

聖ラーマクリシユナ「(やさしく) わたしの心に何か(欲が)起れば、それはお前たちのためにも良くないんだよ。これはこっち(わたし)のことだから——。必要であれば言うよ」

校長「(うやうやしく) はい。仰せの通りにいたします」

馬車が一軒の店の前を通りかかると、そこでチラム(陶器製の喫煙<sup>パイプ</sup>管)を売っていた。聖ラーマクリシユナはラーム・チャトジェーに、「ラーム、一パイサのチラムを買っておくれよ!」と、おっしゃった。タクルルはある一人の信者の話をしておられる。

聖ラーマクリシユナ「わたしは彼に、『明日ボロバザールに行くから、お前もおいで』と言ったら、何と返事したと思う? 『電車賃が一アナもかかるところへ、誰が行きますか』昨日、ベニー・パルの別荘に行っていて、そこで教師<sup>プ</sup>面をして、あれこれ世話を焼いていた。誰も頼まないのに自分から行ったのさ——自分がブラフマン<sup>ブラフマジュニヤ</sup>智の行者だということを見せびらかしたかったんだろう。(校長に向かつて)——なあ、一アナもかかると言ったのは、どういうことだかわかるだろう!」(原典註——当時、

電車賃は一アナだった)

マルワリの信者たちの(食物の山)アンナクータ祭のことに話がまた戻った。

聖ラーマクリシュナ(信者たちに)——プリンダーヴァンでも此処(ここ)と同じ様子(にぎやかさ)だよ。ラカールはプリンダーヴァンでこれと同じものを見物しているさ。でもあっちでは食(テ)べ物の山(ナカ)はもつともつと高いし、人もここより大勢集まるし、ゴーヴァルダナの丘がある。この三つが違っているがね(原典註——そのとき(十月)ラカールはまだ、プリンダーヴァンに滞在していた)

〔ヒンドゥー教は永遠(サナータナ・ダルマ)の宗教〕

「お前たちはマルワリたちの信仰ぶりを見たかい！ あれこそ、正真正銘のヒンドゥーの気持ちだ。これがサナータナ・ダルマ(永遠の宗教)だよ。神様(タタ)を運ぶときの、あの嬉しそうな様子を見たか！ 至(か)聖(み)の玉座を自分たちがかついでいると思つて、嬉しくてたまらないだよ。

ヒンドゥー教こそ永遠(サナータナ・ダルマ)の宗教だよ！ 現代風のいろんな宗教が次々と出てくるが、あれも皆、あの御方のお考えで成り立っているんだし、また、あの御方のお考えで消えて行くんだよ。——長続きはしないよ。だから、わたしはいつも言うんだよ。いまどきの新興宗教の信者たちの足もとにさえ合掌礼拝すると。ヒンドゥーの教えは今までずっと在(あ)ったし、また、これから先も永久に続くだろうよ」

校長は家に戻るつもりだ。タクルのお足を拝して、シヨババザールの近くで馬車を下りた。タクルは上機嫌で馬車に乗って行かれた。